

子どものサイコパス特性と攻撃行動との関連

(中間報告)

筑波大学人間系 西村 多久磨

筑波大学大学院人間総合科学研究科 村上 達也

The relationship between psychopathic traits and aggressive behavior in children

Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, NISHIMURA, Takuma
Institute of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, MURAKAMI, Tatsuya

要約

子どもを対象としたサイコパス研究への関心が高まる中、攻撃行動との関連について多くの研究が報告されてきた。本稿では、サイコパス特性は環境要因との相互作用によって攻撃行動につながるとする考え方を紹介し、学校ストレスと学級集団の状態を調整変数とする素因ストレスモデルに基づく研究を計画した。最後に、研究の進捗状況と今後の計画について報告が行われた。

【キー・ワード】サイコパス, 攻撃行動, 素因ストレスモデル, 子ども

Abstract

With the increasing attention paid to psychopathic traits, many studies have examined the relationship between psychopathic traits and aggressive behavior in children. The present paper points out the importance of focusing on the mediating role of the environment factors to weaken the relationship. It also provides directions for future research on the relationship based on the diathesis-stress model and reports progress of our research.

【Key words】 psychopath, aggressive behavior, diathesis-stress model, children

問題と目的

近年、臨床心理学及び発達心理学領域で、行為障害や反社会的攻撃、非行などとの関連において注目され始めた概念の一つがサイコパスである。サイコパスとは、“情動面、対人関係面、行動面においてそれぞれスペクトラムをなす複合的な成分から構成される障害”のことである (Blair, Mitchell, & Blair, 2005 福井 2009)。サイコパスは一種の人格障害であり、当初は、臨床実践のための診断用チェックリストが開発されてきた (Hare, 1980; Hare, Harpur, Hakstian, Forth, Hart, & Newman,

1990)。しかし、サイコパスはスペクトラムの問題としても捉えることができ (Edens, Marcus, Lilienfeld, & Poythress, 2006), 一般のサンプルの中にも, そうしたパーソナリティを持つ者がいることが想定され, アナログ研究が行われている。

また, 近年のサイコパス研究においては, 子どもや青年を対象とした研究へと関心が拡大されてきている (Salekin & Lynam, 2010)。こうした背景には, Hart, Krop, & Hare (1988) が指摘するように成人のサイコパスの治療は極めて難しいとされていることがある。多くの場合, サイコパスに関する特徴は青年期もしくは子どもの段階から見られ, 深刻な問題に発展する前に予防すべきであると考えられている。そして, 一般の子どもに見られるサイコパス特性は時間的に安定していることが報告されていることから (Barry, Barry, Deming, & Lochman, 2008), 子どもから成人への連続性が仮定され, 子どもや青年のサイコパスに関する研究の重要性が高まっているのである。

海外の研究ではすでに, 成人の一般サンプルでサイコパス特性が攻撃行動を促進することが報告されている (Coyne & Thomas, 2008; Jones & Paulhus, 2010)。また, Frick & Dickens (2006) は成人を対象とした 24 の論文をレビューし, サイコパス特性の中でも冷酷性や希薄な感情に関連する要素が, 攻撃行動や反社会的行動と関連が特に強いことを指摘している。一方で, 子どもや青年を対象としたサイコパス特性と攻撃行動との関連も報告され始めているが (Baardewijk, Stegge, Bushman, & Vermiren, 2009; Raine, Dodge, Loeber, Gatzke-Kopp, Lynam, Reynolds, Stouthamer-Loeber, & Liu, 2006), その数は, 未だ少なく, 研究知見の蓄積が期待されている (Edens, Skeem, Cruise, & Cauffman, 2001)。

また, サイコパス特性と攻撃行動や反社会的行動などを含む問題行動との関連に着目するのではなく, 環境要因によってそれらの問題行動の発現のリスクを抑えることを主眼とした研究も必要とされている (Krueger, 2005)。サイコパス特性は遺伝の影響があるとされているが (Viding, Blair, Moffitt, & Plomin, 2005), 外在化される問題は遺伝と環境の相互作用によって表出される (Krueger, Hicks, Patrick, Carlson, Iacono, & McGue, 2002)。つまり, 子どもがサイコパス特性を持っていたとしても, いかにして攻撃行動と関連させないかという視点が教育的には重要になると考えられる。

このような考えに対して有効な視点をもたらすのが素因ストレスモデルである。素因ストレスモデルとは, 一定の素因を持つ者が, 何らかの要因 (例えば, ストレッサー) を受けることによって精神病理症状を発症するという考え方に基づいた臨床モデルである (丹野, 2001)。本研究では, この素因ストレスモデルに基づき, サイコパス特性が常に攻撃行動と関連を持つと想定するのではなく, ある要因 (調整変数) が加わると, サイコパス特性が攻撃行動の発現を促進させるということに着目する。

本研究では, 調整変数として, 個人レベルの変数である学校ストレッサーと学級レベルの変数である学級集団の状態を取り上げる。まず, 学校内で生起する攻撃行動には, 個人が感じている学校でのストレッサーが関与していると考えられる。これは, ストレッサーが高い状態では, 不安や不機嫌・怒りといったストレス反応が生起されるが (岡安・由地・高山, 1998), 子どもがストレスを感じ, 不安や不機嫌・怒りが高い状態では, サイコパス特性がより攻撃行動に繋がりやすいと考えられるからである。また, サイコパス特性が高いとしても, 学級集団の状態が良いとそれが発現されなかったり, 学級集団の状態が悪いとそれが発現されやすかったりするという仮説も想定できる。河村・武蔵

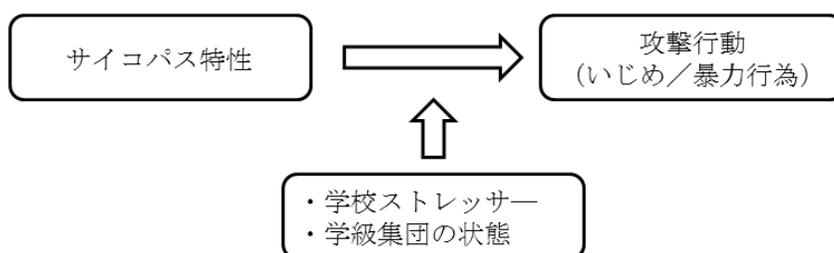


図1 サイコパス特性と攻撃行動との関連に関する環境要因調節モデル

(2008)によれば、学級集団の状態が悪いといじめの発生率が高くなるとされており、学級集団の状態がサイコパス特性の発現を左右するであろう。

以上から、本研究では、学校ストレスラーと学級集団の状態がサイコパス特性と攻撃行動との関連を調整するという仮説を検討する。この取り組みによって、サイコパス特性を持つ児童の攻撃行動をどのように抑制することができるかについて、教育的介入への示唆を提供することが可能になると考えられる。本研究で扱う変数とそれらの変数間の関係を整理したものを図1に示した。

進捗状況と今後の方針

現在、子どものサイコパス研究をレビューし、本研究計画で使用する尺度の選定を行っている。尺度が決定した後、小学生を対象とした質問紙調査を行い、データを収集する予定である。

分析の手続きとしては、まず海外の研究で明らかにされている子どものサイコパス特性と攻撃行動との関連を我が国のサンプルでも見られるかどうかを確認する。そして、サイコパス特性と攻撃行動との関連における学校ストレスラーと学級集団の状態の調整効果を検討し、仮説の検証を行う。

引用文献

- Baardewijk, Y., Stegge, H., Bushman, B. J., & Vermeiren, R. (2009). Psychopathic traits, victim distress and aggression in children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **50**, 718-725.
- Barry, T. D., Barry, C. T., Deming, A., & Lochman, J. E. (2008). Stability of psychopathic characteristics in childhood: The influence of social relationships. *Criminal Justice and Behavior*, **35**, 244-262.
- Blair, J. Mitchell, D., & Blair, K. (2005). *The psychopath: Emotion and the brain*. Malden, MA: Blackwell. (ブレア, J. ミッチェル, D. ブレア, K. 福井祐輝 (訳) (2009). サイコパス——冷淡な脳—— 星和書店)
- Coyne, S. M., & Thomas, T. J. (2008). Psychopathy, aggression, and cheating behavior: A test of the cheater: Hawk hypothesis. *Personality and Individual Differences*, **44**, 1105-1115.

- Edens, J. F., Marcus, D. K., Lilienfeld, S. O., & Poythress, N. G. (2006). Psychopathic, not psychopath: Taxometric evidence for the dimensional structure of psychopathy. *Journal of Abnormal Psychology, 115*, 131-144.
- Edens, J. F., Skeem, J. L., Gruise, K. R., & Cauffman, E. (2001). Assessment of "juvenile psychopathy" and its association with violence: A critical review. *Behavioral Sciences and the Law, 19*, 53-80.
- Frick, P. J., & Dickens, C. (2006). Current perspectives on conduct disorder. *Current Psychiatry Reports, 8*, 59-72.
- Hare, R. D. (1980). A research scale for the assessment of psychopathy in criminal populations. *Personality and Individual Differences, 1*, 111-119.
- Hare, R. D., Harpur, T. J., Hakstian, A. R., Forth, A. E., Hart, S. D., & Newman, J. P. (1990). The revised psychopathy checklist: Reliability and factor structure. *Psychological Assessment: A Journal of Consulting and Clinical Psychology, 2*, 338-341.
- Hart, S. D., Kropp, P. R., & Hare, R. D. (1988). Performance of male psychopaths following conditional release from prison. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 56*, 227-232.
- Jones, D. N., & Paulhus, D. L. (2010). Different provocations trigger aggression in narcissists and psychopaths. *Social Psychological and Personality Science, 1*, 12-18.
- 河村茂雄・武蔵由佳 (2008). 学級の児童生徒数と児童生徒の学力・学級生活満足度との関係 教育カウンセリング研究, **2**, 8-15.
- Krueger, R. F. (2005). Perspectives on the conceptualization of psychopathy. In C. J. Patrick. (Ed.), *Handbook of psychopathy*. New York: Guilford Press. pp. 193-202.
- Krueger, R. F., Hicks, B. M., Patrick, C. J., Carlson, S. R., Iacono, W. G., & McGue, M. (2002). Etiologic connections among substance dependence, antisocial behavior, and personality: Modeling the externalizing spectrum. *Journal of Abnormal Psychology, 111*, 411-42.
- 岡安孝弘・由地多恵子・高山巖 (1998). 児童用メンタルヘルス・チェックリスト (官益版) の作成とその実践的利用 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター研究紀要, **5**, 27-41.
- Raine, A., Dodge, K., Loeber, R., Gatzke-Kopp, L., Lynam, D., Reynolds, C., Stouthamer-Loeber, M., & Liu, J. (2006). The reactive-proactive aggression questionnaire: Differential correlates of reactive and proactive aggression in adolescent boys. *Aggressive Behavior, 32*, 159-171.
- Salekin, R. T., & Lynam, D. R. (2010). Child and adolescent psychopathy: An introduction. In R. T. Salekin, D. R. Lynam (Eds.), *Handbook of Child & Adolescent Psychopathy*. New York: Guilford Press. pp. 1-12.
- 丹野義彦 (2001). エビデンス臨床心理学 認知行動理論の最前線 日本評論社
- Viding, E., Blair, R. J. R., Moffitt, T. E., & Plomin, R. (2005). Evidence for substantial genetic risk for psychopathy in 7-year-olds. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 46*, 592-597.